

ラグビーフットボールの特質に関する研究

— 剣道との比較について —

池田 一徳*, 三浦 健*

A Study on the Characteristics of Rugby Football in Comparison with Kendo

Kazunori IKEDA* and Ken MIURA*

Abstract

In rugby football, spirit is more important than in other sports. Therefore, the term “Rugby spirit” is used in this sport. Similarly the term “Budo spirit” is used in budo (traditional Japanese martial arts), especially kendo, because this spirit is also essential to budo sports.

The purpose of this study is to clarify the following two points;

1. Why does rugby football put emphasis on “spirit” ?
2. What is the difference between budo spirit and rugby spirit ?

KEY WORDS : *Rugby, Kendo, Budo, Spirit*

はじめに

ラグビーフットボール（ラグビー）は殊の外スピリットを重んじるスポーツである。それ故「ラグビー精神」を強調する。武道も「武道精神」という言葉が使われる。そして精神面が重視されている。

したがって本研究はラグビーが何故精神面を重視するのか、武道における精神的特性とどう違うのかを明らかにすることを目的とした。

本研究はこれらの問題に関連する先行研究及び文献とともに、ラグビーおよび剣道の経験を記述した著述等に基づき、両者の特質を明らかにした。さらにそれぞれの特質を比較し、検討を加えるこ

とにより、両者の類似性並びに相違に関する考察を試みた。

1. 闘争性

ラグビーフットボール並びに剣道を次のように定義する。

ラグビーフットボールは媒介となるボールの争奪をめぐる攻防の戦術が行われ、陣取りを競う闘争的集団競技とする。

剣道は竹刀を媒介として、打突部位を斬る・打つ・突く攻防の戦術が行われ、気・剣・体一致の一本となる打突を競う闘争的対人競技とする。

この両競技に共通するのは激しい闘争性である。「ボールを取るか、取られるか」「ボールを持って

* 鹿屋体育大学 National Institute of Fitness and Sports in Kanoya, Kagoshima, Japan.

相手を抜くか、抜かれるか」「竹刀を持って打突するか、打突されるか」をめぐって激しい格闘が行われる。勝敗の鍵を握る媒介としてのボールや竹刀を筆者は物ではなく「魂・精神」であると考えたい。即ちラグビーにおいては魂を15人のプレーヤーが繋ぐものであり、剣道においては相手に魂を伝えるものとする。

ラグビーでは密集の中のボール争奪は命がけである。またボールを持って走って来るプレーヤーを倒すのは恐怖である。

日本ラグビーフットボール協会では、事故防止対策として、「コンタクト・プレー、タックル、スクラム等のための練習を十分にを行い、これらのプレーを行うことが恐らなくなつてからゲームに参加する。」¹⁾と指示している。

また一方剣道競技では、小松の剣道における恐れ調査において「恐怖度の大きいのは、突き技で咽喉部を突かれると感じた場合は、突かれないまでも突かれるという感じを持ただけで、他の部位に感じる恐怖度より高くなる傾向にあった。」²⁾と書かれている。國分は『剣道試合規則』第8章反則、第21条の解説に「足がらみ」について「昭和28年初めて明文化されて以後、現在まで反則事項として規定している。このことは、剣道が本質的に剣を持って争うものであり、体力に左右されず、安全に留意して行うところに特徴があるからだろう。」³⁾と書いている。

両競技共に現在安全面の対策が規則の上で配慮されており、闘争性においても集団と個人の違いはあるが、類似する点が多くあるように思われる。

2. 騎士道と武士道

ラグビーや剣道のような闘争性の強い競技を行うには、自己のコンディションを最高の状態にしておく必要がある。さもないと、コンディショニングが不十分であることが原因で事故が起こり、競技者が大けがをしたり、時には死亡するケースもありうるのである。

このような特性を持つ両競技は、それぞれ騎士道・武士道の思想と密接な関わりを持って組織されている。イギリスのパブリック・スクールでの、

ラグビーを含む近代スポーツの誕生とその発達の姿を描き出している『近代イギリス体育史』において、訳者である加藤は巻頭で、「そこから私は私なりに、…さらに彼らが父や祖父から受け継いだ騎士道精神とそのしきたりなどをミックスして、あのすばらしいスポーツ精神を内容とする近代スポーツを組織したと理解するのである。」⁴⁾と述べている。一方、武道の一領域である剣道においては、富永が『剣道五百年史』において、「元来、武士道と武道とは密接な関係を有するもので、武士道の実践には武術を要し、又厳肅な武道の修行によって向上し、武道に於ける道義は武士道によって発達充実を得るもので、両者は相倚り相助けて離れぬ関係にある。」⁵⁾と著している。

ところで、騎士道精神の徳目として岸野は、清貧と節制、礼節と謙讓、忠誠と献身、正義と公正、勇武と憐憫⁶⁾を挙げている。上記の徳目の中で節制は、コンディショニングと密接な関わりを持っている。パブリックスクールにおける、ラグビー等の組織的ゲームの発達には、競技者の「アスレティズム」⁷⁾という思想が不可欠であった。アスレティズムについて『オックスフォード辞典』では、「節制やまじめさの習慣を促進するという点に価値があるとしている。(筆者和訳)」⁸⁾と掲載しており、ここでも節制の重要性を意味している。武士道においては、アスレティズムに換わる用語として、「身心一如」や、「勝負に勝つ前に己に勝つ」等が挙げられよう。

以上のように、命を賭けた勝負へ向けて、コンディショニングに最大の注意を払い、自己の努力を遂行することは、競技者(騎士・武士)にとって、「やるべきことはやった」という心境になるだろう。騎士道や武士道は、それぞれキリスト教・仏教(儒教)等への信仰が基礎となって形成されている。騎士は、やるべきことはやった以上、後は「神に身を委ねる」と考え、戦いの結果個人の勝利を、「神の加護による」と歎んだ。武士においても、戦いの前に社寺へ参拝をし、後は「人事を尽くして天命を待つ」と考え、その結果の勝利は、「神(仏)の力添えによる」とした。

ラグビーにおいて、楕円形のボールがどちらに

転ぶか分からない状況で、味方に有利な方へ転がるかどうかは、以上の境地に立つか立たないかが重要な要素かもしれない。現代の競技者の精神とは矛盾するかも知れないが、学ぶべき点があるのではないだろうか。

3. 勝敗観

①審判の絶対性

1. 闘争性のところで述べたように、ラグビーのゲームは激しい格闘が展開される。筆者は現役時代、試合場へ出かける時は、戦場へ出かける気持ちで家を出た。命がけのプレーをしようと心がけていたからである。

このような激しい試合なのに、ラグビーの試合では審判の判定に異議を申し立てることはない。何故だろうか。

ラグビーの競技規則第6条⁹⁾に「レフリーは試合中においては唯一の事実の判定者であり、競技規則の判定者である。レフリーのすべての決定は、プレーヤーを拘束する。」「レフリーはいったん与えた決定を変更することはできない。」「すべてのプレーヤーは、レフリーの権限を尊重し、レフリーの決定に反論してはならない。」と明記されている。

ラグビーの試合においてレフリーは、主観的に判断せねばならぬことが多くある。プレーヤーの陰になって、反則を見落とすこともある。神ならぬ人間であり、誤審することがあるかも知れない。しかし判定に対して諾々として服従するのは、審判員の判定を信頼し、勝敗の鍵を委ねる精神があるからである。その前提にあるのはフェアプレーの精神である。

新島の著書『殺身為仁』の中に、「昭和60年の全国大学選手権決勝。慶応大学はあわや逆転トライという場面を作ったが、スローフォワードの判定が下り、同志社大学に涙をのんだ。スローフォワードか、否か。マスコミでも取り上げられたが、議論すること自体がナンセンスだ。慶大の上田昭夫監督以下フィフティーンの、無念さを心の底にしまった笑顔がさわやかだった。」¹⁰⁾と書かれている。

そのさわやかな笑顔は、明治大学ラグビー部北

島監督の指導理念「勝つためではなく、胸を張るために」¹¹⁾と共通する心性ではなかったかと思う。

剣道はどうであろう。剣道も『剣道審判規則』の第35条の中に「審判員の判定に対し、だれも異議の申し立てをすることができない。」¹²⁾と明記されている。また、國分の解説に「この規則は明治以来、およそ、公式試合が開始されたのち、現在まで生きつづけている。審判の判定に際しては、ある程度の主観で判定がなされているので、瞬間の打突に対して、異なる意見を述べることは容易なことである。そのために、審判や打突の特性を考慮し、試合を混乱させないために、これを取り上げないようにした。また、審判は公正無私、神聖にして試合を裁くのであるから試合者はもちろん、他者の判定の異議をうけつけないのがその主な趣旨であった。」¹³⁾と書かれている。

公正にして神聖な裁きに諾として礼を持って引き上げる剣士の姿は、上記ラグーマンのさわやかな笑顔と共通する心性であり、その源流は武士道精神や騎士道精神に求めることができよう。そして後述するノーサイド精神につながるのではなからうか。

②勝敗の超越思想

1) ノーサイド精神

先に筆者は試合場に出かけるとき、戦場に出かける心構えで出たと書いたが、このような気持ちは筆者だけでなく多くのラグーマンが持っている精神であると思う。

1989年より日本代表の監督になった宿沢はその著『TEST MATCH』に、「テストマッチは国と国との戦争である。スポーツという、ラグビーという手段を使った平和的戦争である。両国の国家を吹奏し、ラグビーグラウンドという戦場で国を代表する15人が戦う戦争である。…彼等は国と自分のプライドを持って戦う。テストマッチはラグビーが単にスポーツとしてプレーされるだけにとどまらず、国の威信をかけた戦いである。そう理解しなければ、テストマッチのあの興奮や緊張は理解できない。80分の戦闘を終え、ノーサイドの笛とともに平和は戻り30人の戦士たちは真の友人

になる。』¹⁴⁾と書いている。

激闘が終わると、我が身と共に戦った誇りあるジャージーを相手の選手と交換し、肩を組み健闘をたたえあう。“NO SIDE” 敵味方がなくなったのである。この言葉は1857年に出版されたヒューズの『トムブラウンの学校生活』（復刻本）に出ている。これはパブリックスクールラグビー校におけるフットボールの試合の様子を書いたものであり、「'No side' is called and the first day of the school-house match is over.」¹⁵⁾と結んでいる。

雑誌『プレジデント』の特集に、「サムライ・マインドを失った日本に明日はない」と題して会田雄次と森本哲郎の対談が載っている。その中で森本はサムライ・マインドとは遊びであるとし、オランダの文化史家ホイジンガの『ホモルーデンス』を基にして、「人生は遊びであり、中世というのは遊びが非常に大切にされた時代である。そして、そのモデルとして川中島の戦いで、武田信玄に塩を贈る上杉謙信の故事を紹介しているんですね。そして、これこそ武士道の本質としています。彼が指摘しているのは、謙信が「私は剣で戦っているのであって、米や塩で戦っているのではない」といった故事です。これは戦いの中にあっても軽視されなかった礼儀であり、また別な見方をすればルールを守ったうえで戦うという遊びの精神でもあるというのです。』¹⁶⁾と述べている。戦いは勝たなければならないが、一端戦いの場を離れたところでは敵を敬う精神を持っていたということである。相良はその著書『日本人の心』で、戦国の武将は戦いに勝つために「自らを敬するに値する武将に鍛え上げるとともに、敵を敬する武将たることを標榜したのである。』¹⁷⁾と書いている。生死を賭けた戦争と模擬戦争（ラグビー）の違いはあるが、この故事はノーサイド精神に類似する心性ではなからうか。

2) 犠牲的精神

先に述べた新島は「ラグーマンが大切にしなければならぬ思想が四つある。「自己犠牲の精神」「ノーサイドの精神」「レフリー絶対の精神」「ア

マチュア精神」この四つの思想を合わせて、ラグビー精神という。それぞれが、ラグビー独特の思想である。どの一つが欠けても、ラグーマンとしては失格である。…四大精神の中で、私は「自己犠牲の精神」とともに「ノーサイドの精神」も気に入っている。』¹⁸⁾と書いている。筆者もこの二つの精神が好きなので、この論文に項をおこした次第である。

自己犠牲は裏を返せば献身、奉仕、協力することである。ラグビーに「One for all, All for one」というモットーがあるが、これは献身、奉仕、協力する思想を現している言葉だと思う。

1. 闘争性のところでラグビーの試合で密集の中のボールを取りに行くのは命がけであると言ったが、ボールを取りに行く人がいなければトライはありえない (One for all)。捨て身でボールを取ってくれた人があったからこそトライが出来る。トライした人はそのチャンスを与えて貰った全員の自己犠牲の結果であることを感謝し (All for one)、端々として (剣道の残心) 次のプレーに備えるため自陣に戻るのである。

「一刀流聞書」に、「真剣の勝負に当りては、我身を殺されに行くと思ふべし。左すれば鋭く丈夫なものに相成候。真剣には我が身を殺されに行くと思わねば勝つ事出来申さず候。』¹⁹⁾と書かれている。ボールを持って走ってくるプレーヤーをタックルするのは恐怖である。出来ることなら逃れたい。それを勇気を出して (捨身と決断) 攻撃的なタックルを敢行し相手のボールを殺す。その捨身のプレーにより味方のボールとなり、己は生きることになる。同じく「一刀流聞書」に、「真剣の場に至れば生死二つの場を知らねば用に立ち申さず候。例えば陽盡くれば必ず陰に落つ。陰盡くれば必ず陽になる。生が盡くれば必ず死に至る。死が盡くれば必ず生となる。歌に 山川の 瀬々に流れる 枳がらも 身を捨ててこそ 浮かぶ瀬もあれ』²⁰⁾と書かれている。身を捨てることは己の責任を果たすことであると思う。ラグビーのポジションは、それぞれの役目が決まっている。この役目を責任をもって果たすプレーの一つ一つが、チームという組織の中で有機的に結ばれて、勝利

に導くと考える。

おわりに

ボールを持って思い切り走ることが楽しく、障害をはねのけて思い切り突進することが楽しくてラグビーを本格的に始める人が多いと思う。体力や技術のレベルと目標が高くなるにつれて、次第に厳しい練習が必要になってくる。そして体力の限界に挑む練習をするようになる。このような厳しく、苦しい練習は目標を達成することの喜びを求めたものであり、スポーツの本質であると考え

る。片岡は勝敗および競争について『スポーツの倫理』の中で「スポーツの本質は、身体的なパフォーマンスにあるのであって、決して勝敗にあるのではない。」²¹⁾「何かを身体を用いて成し遂げる、全心身を使って成し遂げるところに人間の満足があり、スポーツの本質が現れている。」²²⁾と述べている。

現代剣道が道を思索して修行をするものであると理解するが、修行を続ける中に喜びとか、楽しさが沸いてくるのではないかと考える。

剣道の本質を、國分は「剣道は近年、ルールに従って、勝敗を決するスポーツ化が進み、道への思索とか、宗教的要素は希薄になりつつあるなかで、今こそ空理の修行、真理に合する即ち「実の道」を求め真実の心、即ち「実の心」で実践しなければならない。そして、「空を道とし、道を空と見る可きなり」即ち、正とする空を道とし、道を空と見ることを剣道の本質とし、迷の雲の晴れた心境で実践し、その実の道を見失わないようにしなければならない。」²³⁾と述べているように、道への思索が本質であるとしている。

大西は著書『闘争の倫理』の中で、ラグビーをする心について「ゲームにおける闘争、愛情、信頼、感動、厳粛、生死などは明らかにラグーマンが純粋に客観的な態度のとれない状態における人間の自己コントロールの修行なのである。」²⁴⁾と述べ、修行という言葉を使っている。

以上のことから推察すると、両競技は、本質的には相違するが内容において区別し難い点がある

と考えられる。ラグーマンの中には剣道における道に近い境地を求めて修行に等しい練習を志しているものもいると考えられる。

以上ラグビーと剣道の精神性における類似性並びに相違を筆者自身の経験に基づき、感覚的なものにより考察を試みたのであるが、剣道の道の精神と、ラグビー精神とには、類似する精神性があると言えるのではなからうか。

また剣道の極意は、ラグビーの技術、戦術面に数多く応用できる点があると考えられる。これらの点については今後の研究課題としたい。

引用・参考文献

- 1) 日本ラグビーフットボール協会事故防止委員会「ラグビーにおける事故防止対策について」1976, p. 9.
- 2) 小松 誠 (他著)「剣道の体育心理学的研究」東海大学紀要体育学部 1973-1, p. 44.
- 3) 國分國友『剣道試合審判規則』鹿屋体育大学 1993, p. 37.
- 4) P.C. マッキントッシュ (加藤 橋夫訳)『近代イギリス体育史』ベースボールマガジン社 1973, p. 3.
- 5) 富永堅吾『剣道五百年史』百景書房 1972, p. 169.
- 6) 岸野雄三「騎士道とスポーツマンシップ」新体育 41-7 1971, p. 42
- 7) 前掲書 4) p. 27
- 8) James A.H. Murray (他編)『The Oxford English Dictionary』Clarendon press 1933, p. 535.
- 9) 日本ラグビーフットボール協会『競技規則』1992, pp. 14-17.
- 10) 新島 清『殺身為仁』西日本新聞社 1992, pp. 31-32.
- 11) 北島忠治『前へ』社会経済国民会議 1989, p. 119.
- 12) 前掲書 3) p. 47.
- 13) 同上書 p. 47.
- 14) 宿沢広朗『TEST MATCH』講談社 1991, pp. 9-10.
- 15) Thomas Hughes『Tom Brown's school days』(復刻本) J.M. Dent & Sons Ltd, 1985, p. 101.
- 16) 会田雄次 森本哲郎「サムライ・マインドを失った日本に明日はない」『プレジデント』1992-10, p. 59.
- 17) 相良 享『日本人の心』東京大学出版会 1984, p. 47
- 18) 前掲書 10) p. 21.
- 19) 高野左三郎『剣道』鳥津書房 1915, 第6章「一刀流聞書」 p. 231.
- 20) 同上書 p. 231.

- 21) 片岡暁夫 (他著) 『スポーツの倫理』 不昧堂出版 1992,
p. 22.
- 22) 同上書 p. 23.
- 23) 國分國友 「剣道の本質について」 鹿屋体育大学研究紀
要 1991-6, pp. 103-104.
- 24) 大西鉄之祐 (他著) 『闘争の倫理』 二玄社 1987, p. 244